



學術

半腐朽木の利用

江波多

林産物需用増進に伴ひ年々其價格の昇騰を來し従ひて林野に存する廢物の利用開發せらる、者多し腐朽木及根株利用の如き其なるべし蓋し林内風倒木或は立枯木の半ば腐朽するに至れば樹體內に存する樹液又は色素特に單寧の如きは深く内部に侵入し或ひは微菌の作用によりて心材部に種々なる變化を與へ自然に特殊の雅味ある材種を形成するは吾人の夙に知る所なり殊に地中に永く埋没せる材種の如き然りとす

林地に委棄せられ腐朽に傾かんとせる無數の根株の如き其材積多額に上るれば之が材質の變化せる良好なる部分を利用するに於ては遺利少なからざるべし

時計製造業地として有名なる瑞西國中「ノイエンプルヒ」に於ては數百年前より既に普通材種に見る能はざる特殊の材種を時計製造に要する貴重なる原料に供し之を澤出し或は美術的加工を施し其消費額少なから

すと云ふ

近時木材染色其他の技術進歩して或は化學的に或は機械的作用によりて優美なる材種を製出せしむるに至りれども其多くは今尙室内工業として熟練なる職工の手先により最も緻密に且美麗精巧なる種々なる製作品を産出す故に半朽木の粗材「キログラム」に付「フラン」乃至六「フラン」を値し優等品は十「フラン」に達すと云ふ而して針葉樹は一般に時計製造用裝飾材として第二位にありて却てミネバリ、自楊、柳、菩提樹等の如きは半ば腐朽するに至れば色澤と重量とを變じ之を加工すれば絹糸狀其他美麗なる光澤を發せしむる事を得べし

現今時計製造に要する是等原料の産出地は中央「アルプス」並に東方「アルプス」並に「ユーラ」地方其名高しと云ふ（瑞西林業雜誌所載）

地形

伊藤

火は大速力を以て山上に進行す何となれば熱せられたる氣流は火燄を上方に誘導するを以てなり

（森林火災續）

明治四十四年四月二十五日印刷
明治四十四年四月二十七日發行

編纂發行入
安井正夫
長野縣松本市本町百八拾四番地

印刷者 鬼澤忠雄
全縣全市

印刷所 交文社
番地

發行所 長野縣立校友會雜誌部
木曾山林學校

○本誌目次

- 學術。半腐朽木の利用、森林火災ノ抹蘇林更新、一樹一木、柏の利用、佐渡の竹材、
- 文苑。我友よ、熾英小言、人生の四季、隨書日記、冬から春へ、和歌
- 雜報。卒業証書授與式、入學式、伊藤教授告別式、製糖會、寄宿舍便、便島便、編輯部便

落葉枯枝が平等に地上に配布せられあるときは火の進行する速度は傾斜の度に正比例す火が山頂を通過すれば徐々として谷に下る岩壁溝等は火を妨害して容積の増加することを防ぐ廣大なる平地にありては火は不平等に燃え峻地に比すれば容積面積を増大すること速かなり

土壌の特性
乾燥に傾く土壌は火の密度を増加す即ち砂石灰土は速かに温まり且つ乾燥するを以て火は常に猛烈なり

南方又は西方の傾斜地は北方又は東方に比してより多く猛烈なり何となれば西南の二方面は北東の二方面に比してより温暖にしてより多く乾燥するを以てなり

大氣の状態
火の特性は更に大氣の状態によりて左右せらる概して風の速力大なれば大なるほど火の進行はより速かなり火は風が不規則に吹くより同一の勢力を以て吹くときにより多く猛烈なり故に連續して吹く強風は森林火災を最猛烈ならしむ

大氣の乾燥は亦火を猛烈ならしむ故に日中の暖かなるとき乾燥せる大氣にあふられば

猛烈を極む
 濕潤の大氣は森林火災を妨止す俗に「夜間は火災を消し易し」と云ふは此理による夜間は風なく且つ大氣比較的重くして且濕潤なればなり

表面火の急速

地表火の速度は豫測することを得ず何となれば種々の條件の元にて非常に変化するを以てなり東部堅木林に於ては地表火は一日五哩に達せざることあり

草の燃焼

殆ど凡ての自然林中には草の多量あり其枯死せるときは火の進行は甚だ速かなり多くの森林に於て林中に草の存在する否と地表火に大關係あり草は其高さよりも其密度によりて多く左右せらるる

灌木火災

灌木林は晩秋或は翌春に及ぶも林中に多くの落葉をこむ其實例は、林中に多し火は往々かゝる灌木林を貫通して大損害を致すかゝる火災を灌木火災と稱す

幼齡林を貫通する火災は木葉を焼き直に林木を枯す林木疎立して樹冠未だ閉閉を完成するに至らざるころにありては火災は樹冠を焼き激せられたる地表火の特性あり樹冠相接し鬱閉完成せるときは樹冠火災は展開す

灌木火災の一種は西北の矮樹林に於けるものなり灌木密生し燃焼し易き木葉を有する多くの林木あり落葉フォームの厚層林地被ふところにおいて火は猛烈にして破壊力盛なり

土地火災

合衆國の濕潤なる北部森林の多くに於て其通なる植物質物体の深き集積に於て燃ゆるところの運火災を土地火災と稱す

丁抹國森林更新

小松 吉次郎

此原文は「アンリカノホレストロー」に掲げしもの今一寸拙譯して紹介致します
 抑も丁抹國は昔時森林に富みて鬱蒼たる林相を呈せしが漸次伐採利用し保存の方法を講せざりしかば至る所に林相は破れ殊に半嶋の西部中部の如きは濫伐の結果地味大に衰へ一五〇〇年の頃は其等の地方は全く不毛の地となり僅かに小灌木の荒原と瘠悪なる砂丘と化し終りかかる慘害も皆國民自ら招く所にして其不注意なる取扱ひの結果ならざるはなく當時國民は未だ森林の効能を知らず森林の存在は國民生活上に至大の關係を有する所以を解せず唯不合理なる利用をのみ行へりされば皆て森林の繁茂せ

し時代は濕氣に富み氣候も温和なりしが一度荒廢しては氣候は粗惡に空氣は燥乾して植物の生育を遂げしめず偶々水流に沿つて少數の住民原野を開墾して牧草地を設けし水源潤れて溪底益々深く也地下水は愈々低下して牧草地は再び灌木地と變じぬ當時未だ東部地方は稍肥沃の地たりしが十八世紀の初期に及ては亦森林を見る能はざる姿となれり然るに十八世紀の後半に至りて國民は漸く覺醒し森林の必要を認め一八〇五年には遂に森林保存法を發布し荒廢地の植樹を初め或は政府は之れを奨励したれども多くは不成功に歸し唯此失敗の経験によりて良好の果實を見るべき梯を築き作りしが即ち荒廢地は必ず或種の前生樹によりて土地に養分を與へ稍肥沃地となして然る後に林木は十分の生長を遂ぐことを得と如此にて一八六六年までは小部分に植樹せられ海濱には農作物の生育するに致りしが未だ中部及西部は見渡す限り唯灌木の疎生せる荒原たり或は所々カシオナラ等の小森林を形成するものあれども強き西風に吹き破られて樹梢屈曲して殆ど地上に匍匐せんとすされば王國の五分の一は衰へき砂漠の状態にありき於て多量の國民は其數度の失敗により最早此以上の努力と資金とを土地改良に投すべき勇氣は全く掛け殆ど恢復絶望の時しも「コール、イ、ダ、ル、ガ、ス」なる一仕官出て之れを救へり氏は比喩れなる勤勉家にして又熱烈なる愛國家也幾多の困難に克ち數多不明の原因を究め遂に此難事業は直に利益を見る能ざるを知るや専ら國民の愛國心の援助によらんせり幸哉時は維れ丁抹國は一八六四年の戰爭にて「シユ、レ、ス、ツ、ツ、ヒ、ホ、ル、ス、タ、イン」州を失ひ不況氣は國に充ち國民は慷慨の涙に咽ひし時なりきされば大面

積の土地を改良し割譲せし土地を誠意味に於て償ふべき森林更新事業の思想は國民の熱心なる援助を得る所となり而して此事業に當るに「ダ、ル、ガ、ス」氏より適當なる者として一人もなく氏は直に一八六六年に「タ、ニ、ン、ユ、ヒ、ス、ソ、サイ、チー」なる結社を組織せしか多くの幹援を受け中にも領事「ポントビダン」氏の如きは非常に「ダ、ル、ガ、ス」氏の事業を助け或は政府は補助金を以て奨励し漸々事業の進歩と共に増殖し個人の義捐金も亦盛にして内外其成功を希ひ「ダ、ル、ガ、ス」氏は専心森林の荒廢を恢復せんぞとされど事業の發展には各階路あり其階段の次第は下の如し

力なる保母者たる「モンタナ」種は生長盛にして凡う十年後は之れを下木とすを以て漸次混濁樹を害をうけて「スプルース」は被壓木の形となるを知れり於茲第三の發達は「モンタナ」松は幼時に伐採して「スプルース」の生長を助けし其成長佳良にして肥沃地に植われしと異らざるを發見せり一方には「モンタナ」松の作用につき數年間學者間に疑問は存せしも畢竟「モンタナ」松の根株に顯微鏡的微生物寄生して植物の生長に必要な窒素を生産し附近の「スプルース」に供給するものなりとの説は一般に信せらるるが如し而して一度「モンタナ」松に保護せられ養分の供給を受け生長したる時は最早「モンタナ」松は「スプルース」の生育に必要な數年生長の後は寧ろ有害なりと見做るに至りて二樹混濁の歩合を減らし「モンタナ」松一本に「スプルース」一二本となり且つ「スプルース」の被壓木とならんぞとすれば忽ち「モンタナ」松を伐採し棚抗製炭「タール」の材料に供給す而して「スプルース」中最多く植栽するは白樺及赤松

「ナイター」の活動は海岸に連亘せる廣大なる砂丘に造林をなし飛砂を防ぎ或は灌漑排水の事業をなし廣大なる原野は牧草地に白堊質粘土の沼澤は農地に化せしめたる面積は二五〇〇方哩以上にして實に王國全面積の凡う七分の一に當り林相は改良せられて最早灌木の疎生せる荒原は見ざるに至れり小作人も地主も皆此事業に感動し最も瘠せたる地方も皆耕地は林衣に圍まれ小作人地主により植栽せられたる大小の森林は今や彼等が朝夕愛慕する寶となれり思ふに此莫大なる利益は一個の熱心なる愛國者によりて實行せられ森林は立派に林相を保ち農耕は發達し住民は日と共に増加し彼の以前荒原の中心たりし地に「ヘルソン」市の如き都會を見一八六六年に僅に四十人の住民なりし寒村は今や五〇〇〇の住民となり其發達驚くべし「殘部少しあれど此れにて止む」

一樹一木

小松 吉次郎

扁柏はヒノキと訓す漢名柏は「コノテガシ」なり掌を立てたるが如く葉枝の直立する灌木にてヒノキに似たり扁柏は平かなり、さればヒノキはコノテガシの葉を扁平に生したる木なりとの謂か或はヒノキは火の木なり古來礎石の代用して打ちて火を得しと、又は互に摩擦すれば發火すと云ふ、抑も人よく火を得しは何れの頃か未だ知るべからざるも此の木によりて火を發見せしや否や嘗て聞く今を去る凡七八十年前木曾に山火事ありて大面積の扁柏林を焼き拂へり山林奉行は地元村民の所爲ならんとして嚴重に取調ぶる所ありしが村年寄一人進みて扁柏は風により樹幹摩擦せば自ら火を發するものなりとて奉行の面前にて之れを實驗し

此度の火災も亦自然のものなりと立証せし
 かなりて止みぬとこはヒノキは火の木
 なること意也
 檜は古名を「サキグサ」と云へり古今集にこ
 の殿はうべも富みけりささぎの三つば四
 つばに殿造りせり又枕の草紙に「檜、人近
 からのものなれど三つば四つばの殿造り
 云ひて前歌の意を明かにせり、檜の幹は杉
 に似たれども枝葉は水平に出て形備はら
 ず葉は針葉をなさずして小き鱗片の重り
 たる状なり又其一種に花柏(檜)ありよく似
 たりされど檜の葉の鱗片は先端圓みを帯び
 て表面には中央に白線あり花柏は鱗片の先
 端尖りて鋭く裏面の中央は緑色にて周邊に
 沿ひ白線あり檜に似たる木に羅漢柏あり此
 は鱗片一層大にして葉柄も亦粗大なる鱗片
 にて包まれたり「アスヒ」は明日檜になるこ
 の意なりとてアスハヒ、アスナロコ呼ぶな
 りとは言海にあり或清少納言も「アスハヒ」
 の木この世近くも見えず御峯に詣て、歸る
 人などしかもて歩くも、枝さしなごのい
 と手觸れにくげに荒々しけれど何の意あり
 てアスハヒの木とつけん、云々
 我國の檜に類似せるもの支那及北米に數種
 あれども其良材を産するに至りては決して
 我れに及ばず我國古來人は武士木は檜と並
 び稱して建築材の王とせり材は白く稍帶黃
 色にして香氣強く光澤美なり飽削容易材質
 強靱にして負擔力殊に大成は凡ての建築材
 に用ひ大層の柱梁或五十萬本の電柱漸多の
 大橋を主とし尙ほ反張少なれば欄板になす
 材色麗はしければ指物材となりて細かに山
 形菱形等に造られたる障子の骨は如何にも
 優美なり曲物材桶材として最も廣く用ゆ殊
 に水濡に堪ゆること強ければ船艦材となり
 百石千石積の舟より漁船軍艦にも必ず用ゆ

其數年鹹水に浸し稍腐蝕したる者は東蕨に
 かけられて木理を鮮かにし色錆びたる板は
 廣き庭の圍となりて舟板塙と稱して京阪地
 方に高尙なる者とせられ其雅致之れに及ぶ
 ものなし或は薄くへぎて「ヒノキガサ」に編
 めば雨も日光も防ぎ得て軽くして冠りたる
 心地もよし木曾蘭村は七八萬蓋を毎年製す
 と云ふ僅に一尺の木片も粗末にせずは割箸
 を作るべくた正月などは新らしき箸欠く
 べからず子持箸とて中より小楊子の出する
 は面白き思考ならや此木は奇異なる木目
 なれども柱目には床柱天井板として誇るべ
 く皮はヒツザ葺に用ひ神社佛閣の屋根もこ
 れあるときは一層神々し
 其園藝上の種類にてクジャクハは前庭芝
 生の間に丈低く圓形に手入して植うれば人
 目を引くこと多くホウオウヒバ、スイリユ
 ウヒバは泉水噴水の邊或は雪見燈籠の後影
 に立ちたるは實に好ましかれど狭き庭には
 引き立たぬものなり
 我國何れの地にも檜よく生長し中にも木曾
 高野、阿里山を主とす木曾山は帝室の備林
 にて古來多量の良材を産し殆ど無盡の寶庫
 たり嘗て信長京師に覇たるや其尊王の赤誠
 は發して大廟の修理に及び天正十年神宮御
 造營材を伐出したるを初めとし爾來毎二十
 年御改修の例を待與せり御用材は良材中の
 良材にして精撰に精撰を極め給ふものにし
 て二十年毎に幾千の大材を要することなれ
 ば木曾にあらざるは決して用立つべき所なし
 此一大美林天下の美林は如何にして保存
 せしか五木制度の賜と云ふべし抑も木曾は
 木曾氏累世の領地なりしが天正十八年秀吉
 義昌を下總戸に移封し其所領を失ひしが
 慶長五年大阪の役起るや木曾氏の舊臣等軍
 食盡瘞して東軍を迎へ功ありしかば事平ぐ

に及て山村甚兵衛木曾の代官となり元和
 名古屋藩に附庸して山林を監守し幕府の用
 材を出せしか人民屢罪を犯して濫伐を行ふ
 ものありければ幕府は寛永中甚兵衛の職を
 解き市川甚左衛門を上松に派し奉行となし
 留山巢山を區別し伐木を禁止し他を山とし
 五木の伐木を嚴禁し其餘は人民の自由任せ
 せり後六年甚兵衛の復職せらるも山林監
 守は市川氏の司る所にして爾來山林管轄規
 則伐木の所方を立つ初め山村氏に代官職を
 賜ふや毎年山中の造材素木五千駄を山村氏
 に六千駄を人民に附するを例とせり寛永中
 市川氏職に當るや素木の伐出を停め巢山留
 山及五木の禁を設け森林を監制して民用を
 辨せしむ之れ舊來の民情に違ふこと多かり
 しも漸行して省みず藩も亦令を犯すものは
 刑典を以てすること嚴なりしかば木曾の山
 林愈美にして紀文隨筆の亂伐を逃れ今日に
 及ぶまで一望百里の深緑天日を遮るの美觀
 を存するを得たるは全く五木制度の効なら
 ざるはなく明治二十二年御料林となりし今
 や世傳御料の寶庫となれり大廟の御用材其
 他帝室の用材は盡く此地に求め木曾支應の
 管理の下に益寶庫の開發と利用とに全力を
 傾けて怠らず學術的に更に美林を形成せん
 と餘念なし
 里童歌て曰く「木曾で青いののはヒノキにサ
 ハラ、ネツやアスヒに高野檜之れ五木か森
 々と十五萬町歩の御料林の盛なるを吐露
 するにあらずや更に「木曾へ木曾へど皆行
 たがる木曾に木山があればこそ」うれ其恩
 惠の累世深きを思ひ天恩の窮りなきを拜謝
 して四隣に誇るにあらずや彼の「恐ろし
 や木曾のかけ路の丸木橋」或は「稀れにまつ
 都のつても絶んどや」云々の句は皆之れ行
 路一片の皮相の感を述へたるものにて未だ

俗語の如く里人の真情に達せざるものなり
 我南海の要領臺灣嶋に一大美林あり阿里山
 とす檜樾其他の潤葉樹著し蜿々數里に亘り
 地勢平地に近く毫も蕃族の配慮すべきもの
 なく反つて附近の蕃族を役すべく總ての
 点に於て最も有望の地なれば拾て總督府は
 之れを調査し一旦藤田組が其材採權を得て
 材積調査鐵道布設に着手せしが經濟界の不
 振に遇ひ事業忽ち頓座し世論喧しかりし阿
 里山問題は一昨年議會にて總督府の直營に
 歸し爾來諸種の準備を急ぎつゝあり此大森
 林は面積約五千五百町歩材積は千四百萬尺
 べ之れに混生せる潤葉樹を加ふるときは總
 價額約五億圓に近かるべしと後藤民政局長
 阿里山を巡視せしが其記に曰く
 阿里山與新高山隣接海拔八千尺森林地帯
 分爲二。其在六千尺之地者。爲廣葉樹則
 樺也。其在七千尺地者爲針葉樹則檜也。
 大低長一百三十尺徑二十尺其數不知幾萬
 嘗讀趙甌北樹海歌。竊以爲文人誇張之言
 。今見此森林始知甌北歌不誇張最末盡形
 容。蓋自勘驗以來實環地球所罕見者。跋
 涉高山又大河。巡行不暇懶討塵無詩。恐
 被騷人笑。吟斷雲山松樹海歌。
 眼前風物動吟情。詩料過多句不成。一片
 心期何堂寫。筆鋒隨北自縱橫。
 阿里山は獨り本嶋の珍たるのみならず世界
 中北米を除きては何れの所にもこれに匹敵
 すべき森林無く毎年二十萬尺を伐採して
 盡くることなく八十年の輪伐にて事業は永
 久繼續し得べしと大なりと云ふべし

地方の原野或は大嶺の山麓に生育す、
 性はよく瘠地に堪へ落葉松赤松と共に火山
 灰より成る土壤にも尙ほ善く生育するを見
 る。然して野火に對しては他樹種を凌ぎ殆
 んど絶對の抵抗力を有し種苗時代の小期間
 を除けば之に侵さるるも毫も痛痒を感ぜざ
 る者の如く却つて他樹種衰退の際に乗じて
 根毛を伸し枝葉を張り大に自己の勢力を振
 ふを見る然して材質柔靱にして容易に折れ
 難く萌芽力盛んにして又よく樹下に雜草を
 繁茂せしむ是故に東北地方の如き産馬業の
 盛にして且つ廣大なる原野に富む地に有て
 は天然生ものを導き或は人工植栽を施し
 相當の施業方針を定め放牧と秣草とを併有
 する作業を執り經營する時は必ずや有利の
 業たるを疑はず近來當地地方は一般に此利を
 悟り私有林は勿論或は大林区署との間に地
 主權を設定し盛んに此樹の造林を施し前述
 の目的を遂げんとするもの増加し來りたる
 は喜ぶべき趨勢なり
 借而此樹を利用しより分類する時は第一に
 材を製炭として其質檜其他の雜木の上に居
 り又大なるは鐵道枕木として其保存期殊に
 長き特点を有す。樹皮は此樹の最有用部分
 にして現今染織用として之に過ぐる物質な
 く其需用の廣大なる徑一寸の矮木を剥皮し
 て供給に適なきを見て大体を推知するに
 足らんか。
 葉は餅を包んで所謂かしわ餅を製し或は魚
 類其他の包装用として利用の途あり近來此
 樹材に天蓋を放飼して最も容易に養蠶を行
 はんとする者あるに至つては柏の利用も豈
 甚大と謂はざるべけんや又普通林地に於て
 跡地造林上最も害をなす根株は萌芽木と
 なるを以て毫も他の支障となる事なし然し
 て其更新法の如き誠に易々たるものにして

殆んど人工に依らず全く天然力に依頼して
 其目的を達し得べし。
 輪伐期は大抵二十年を限度とす之れ此樹は
 若年の頃程多く單寧分を含有し二十年を過
 ぐれば其分量大に減少し随つて皮價を下ぐ
 るの恐あればなりされど又幼に過ぐる時は
 剥皮困難にして徒らに手間費を多くし收支
 償はざるの恐あり二十年頃は之等の欲し
 補ひて最も有利なる時期なりさて伐採した
 る材は直ちに剥皮し剥皮したるものは直ち
 に乾燥の手段を取るべし此乾燥は所謂日影
 乾を最も望ふも大面積に渉りては到底如斯
 事は望まれ難しされど茲に最も注意を要す
 るは乾燥に當つても又一其後も切雨、水に
 濡らさしめざる事なり若し之を濡す時は著
 しく單寧分の減少を來すものにして引いて
 價格低落の因となる又材は直に製炭の用に
 供するものにして其方法は普通通行の方法
 と差異なし尙剥皮の時期は初春樹液流動
 の時期を撰定するや論なし而して伐採した
 る跡地は根株よりの萌芽により更新するも
 のにして其目的を達する爲め一回の火入を
 施すを最捷徑となす之れ林地に生する他樹
 種を撤去し及び柏樹及雜草の萌芽を促進せ
 しむる爲にして一見火入の危険を感ずるも
 相當の防火の設備を施さば其恐れなく一回
 位の火入ならば林地の之れが爲め荒廢の恐
 れなきは勿論却つて火入の爲め生する肥料
 に依り林木及雜草の生育を助くる者なり殊
 に附近の榛の木の野生する場合に最も火
 入の必要あり若し伐採の儘に放任する時
 は木の種飛來して遂に柏樹の萌芽は下壓
 木となる此例は到る所目撃する所なり斯く
 して自然に放任する時は十數年の後再び更
 新の時期來り永遠に保護する者なり参考の
 爲め剥皮賃及皮價等を掲記すれば次の如し

柏の利用

柏樹即ち木曾地方で「かしわ」と放言する
 此樹は多く温帯北部に生育し天然には東北

生

一、剥皮質一把(七貫五百多)六錢五厘
一、一人一日剥皮功平均十把
一、一把の價格(東北線一戸)圓に三把
一、小元より一戸(三三三)圓に七錢
一、駄馬一頭の積載量平均五六把、但一日
一、社復

佐渡の竹材 柳 美

風景や歴史を以て鳴つてゐる佐渡は其裏面に於て又竹材の名産地として一般に知られてゐる。然り實際國內到處竹林を見ない所が無い位で現に我郷里なども殆んど竹箵を有せぬ家がない。

文苑

我友よ! 西野 入徳

成績優等品行方正位の讀辭を添へて長年

月かよつて漸く一枚の卒業證書を手にしたからつて鬼の首でも取つた様に偉がりやうく社会の片つぱらに覺つた足取りで踏み出し得たからとて世界の傑士オボレオンも三舎を避ける様な權謀をして肝腎な腦天(思想)の腐つてゐるのはエヌメチツクやパールで隠し目先(常識)の見えないのは眼鏡の光でまかし借人情を操る事にかけては中々に如才なく好言至れり合色盡さざるなしてあるが併し實務と來ては驚くばかりに要を得ない、學校にありなば一々手を取つて教へても貰へ様が借社會と云ふ問屋は中々にうらうら易く卸してくれない、恰も猫の鼠に於けるが如き眼光を以て吾等新參者の品定めに御多忙である、うへて來てかざる有様とあつては高價の金線も獨逸球の御光も何んにもならない折角奇麗に分けた頭髪も土の汚れにツツカリ染み果て、見ながら本人、少し位の毛唐文學をば聲高に讀み得る眼はあつても活社會の眞情を讀む眼は持たない、見えて凡て「才子は如斯」云はぬばかりにツツとすまし込んでゐる、やがていくらか眼も見へ耳も聞ゆる様になつたかと思ふと今度は弱者を見る事犬か猫か馬か牛の氣になつて驅使し以て我こそは天下の敏才なりと氣取つて得々然として居る。

近來又岐阜縣のさる大家を聘して斯學の講習があつたように聞いてゐるが今後益々發展することであらう。

抱負あるを要します、然り事務室の一隅に小さきベンを動かす時又吾人此抱負あるを要します。
オー此重大なる責任をドツシリと其両肩に擔はせられたる吾人林業家たるもの何ぞボシヤリして居られませう! 寝ばけでは居られませぬぞ!

樵茨小言

ピラミット生

抱負あるを要します、然り事務室の一隅に小さきベンを動かす時又吾人此抱負あるを要します。

竹を見よ根は同じけれども性異なれば皮はいやしき草履とまで下り足下の塵踏まさらるれども幹は天子の御簾とも昇り龍顏長くもうるわしく夫れ半かかげては御苑の櫻蔭に白み香爐峰の雪暖かに清女の才智もこれより聞ゆさるる竹皮草履落馳しては遊山の連どなすものなきにあらざるを落花の跡に落葉荒して緒はちぎれ形薙刃のさまとなりては雨の日にでも拾ひ手のあるなし。

人生四季

福田 幽美

さればです、第二の「ローマ」を東洋の一隅に興すのも亦之を頌すのも畢竟之吾人勇士の活動振一つにあるのです。

幼年と冬、人生るゝや慈母の温かき手に抱かれて養生の時代である、欲望なく、惡心なく、無邪氣にも笑み且つ泣きて母の乳房に戯れてゐるのである、實に幼年の心や天真爛漫とも云ふべきである、冬は休憩のななき花を咲かせ天地のなべては純潔なる真美を現してゐるのである、冬は静思の時、幼年は休養の時、寒月物凄く木梢に牙を光景は幼年の母を慕ふ瞳の色に似てゐる少年と春、冬近ければ春來る、春くれば野山の淡雪は消えて若草は萌え、すみれ、蓮華草は笑み、梨や桃は咲き、蝶は霞の奥より其等の花を翳つてくる、雲井はるかに雲雀は鳴く、うらうらと刺戟ある花の香、強き花の色彩や松風の響、浪の音等に依つて春の山里野崎磯邊は飾られるのである。

幼年長すれば少年となる、少年の胸には燃ゆる易き血潮はひとしほ高き理想を抱く、大臣、國會議員、博士、將校其の他いろいろの然かし、いづれの花が實を結ぶやら花の咲く時は風や雪は多いのだ
月下の櫻は妖艶にして詩人を酔はしめ、月前の婦女子は窈窕として少年を迷はしむ。春の蝶に導かれて宙中天にならぬは肝要少年には努力覚醒こそ希まされしけれ
青年と夏、人の心を湧きたる花の春過ぎれば一面に苦々しい色と匂とに充たされた青葉の世界、木樹の果實の結ばれる時である、もう少年時代を無事に過ぎればや、冷静なる頭脳や態度で時代を見るようになって若々しい胸の血汐が燃えるのも昔かしの事となるのだ、ろうして理想の花は果實を結ぶのだ
青葉の世界……印象の鮮かなる空氣時代……胸の花の幾多の雨風を凌いで果實を結んだ人は喜色満面、實の結ばざる人、浮世の抵抗に敗れたる人は春の時代の倦怠を嘆き熱苦しい惱みに苦しむ人である
秋と老年、熱い夏が近づけば冷しい、秋が来る弾力の烈しい新緑の香は失せて木樹の葉は皆色が附いて来る、人も老年に至れば頭髪霜をたき希望は止み意氣銷沈して隠居士義を取る、秋……秋の野山はうら淋しい蕭條たる川沿の古柳空渡る雁の聲、又は殘月落ちんとして露に明けゆく野末の枯草に咽泣く虫の音は細うり斯くして秋は永久に眠らんとする、老年も食つて眠つて彼の幾多

歸省中の日記

二章 岫 雪

の星霜をへたる疲れし瞳は遂に開かない
木曾よりは暖い故郷の風光は、長閑だ、うららかな、ぶら／＼して居るも面白くない、今日は兄さんのお手傳に、植林と力味出した。
破れ神輿に、破れ股引、色褪せた烏打帽子に身を装つて、鍬と鎌と、袋裏につま込んで、すた／＼山奥へ飛び込んでいった、まだ地帯もなにもしてない、一生懸命に鎌に拂らはせ、鍬で掘つて、黄昏までに檜百本植わて歸つた、沿道の右でも左でも黄鳥が世の太平を謡つて居る。庭の紅梅は五六輪咲いたアアよい香りだ。
三十一日。和かな日。
昨日の疲れか足が重い、杉苗百本背負つて這ひ出した、な／＼かまの花は美しく咲いてる、足を迂らして二度倒れた、三時頃までに植えてしまつて歸つた。濱に居る五君から葉書が来る、波止場の景實によい……『實に思ひ出多きは故郷の名なし小川の水の音、君と泣きしも別れしも……』など書いとる君も懐しき郷里の去年の彌生を夢みつゝあるのであろう、早速繪葉書で返事を認めた。
冬から春へ
二年 家高 薫南
△甘い歡樂の香に酔ふた紅葉は哀れ霜の及

に襲はれてやがて長い放浪の途についた。悲哀のこもつた空氣は葉から葉へ傳つて、バラ／＼と雨の様に散つてしまつた道も谷も石の上までも一面に
懐へ落葉散りこむ山路かな
ろ／＼だ落葉の森に立つたら懐へも散りこむに違ひない。残るは寒うな梢のみ……森も林も終日嵐に吹きまくられるのである。
△雪……霜……風……うれらすべての寒さはひし／＼と押しよせて来た。木の梢は成長をどめた、うして春の日を心に待つて、毎日冬の景色をだまつて見てゐる。
△シト／＼と未だ雪は降つてゐる。林の中は實に静かた、谷川の流れるも留りはしまいか？シト／＼と奥の奥まで沈黙が續く。深い沈黙……其沈黙の中に漂ふ空氣は太古の空氣ではあるまいか？
△日はだん／＼のびて来た、冬の荒神はろ／＼逃げ仕度にとりかゝつた。雪がチク／＼とける。雨の降る度に道はかたまたつてくる。林の中では芽を出す準備にいらがしい。
△霞はごころからとも知れず山を包んでしまつた。林は急ににぎやかになつた。春の日はくまなく流れこむと霧は優しく春を歌つてゐる。ああこれこそ真の樂園……平和の神はきつとごころに笑つてゐるであらう？若芽は日増に成長する。

和歌

春夜興

安井 正夫

つきといひはなとうたひてひとこころは
ほろになりぬはるのよはかな
述 懐

よをわたるみちをふむにはしきしまのや
まごころのほかなかりけり
高崎正風翁

にこりなきかがはのみつをくむからにし
らへもさよさきみがことのは
駒ヶ峯は霞の奥に座りけり金刀比羅山に
杖ひく夕

俳句

岫 雪

桃咲ける川の流れや水車
月朧破窓に梅の香り 覺

雜報

第八回卒業証書授與式

三月二十七日午前十時舉行式場は紅白の幔幕を以て圍まれ祝卒業の扁額と發給を以て一段の光彩を添へられた來賓には縣知事代理平川郡長、松田技師、内藤技師武藤判事宮尾信毎記者藤川民報記者其他十數名有江柳校長の勸語捧讀、伊藤教頭の學年報告ありて卒業証書修業證書及賞状を授與され次に卒業生に對する校長の訓辭、平川郡長の知事告辭代讀、松田技師、内藤技師、武藤判事、宮尾記者諸氏の祝詞演説あり終りに臨み在校生總代の送辭卒業生總代の答辭朗讀ありて午前十一時三十分閉式
次に本年度卒業生の氏名を擧ぐれば次の如し

りて卒業証書修業證書及賞状を授與され次に卒業生に對する校長の訓辭、平川郡長の知事告辭代讀、松田技師、内藤技師、武藤判事、宮尾記者諸氏の祝詞演説あり終りに臨み在校生總代の送辭卒業生總代の答辭朗讀ありて午前十一時三十分閉式
次に本年度卒業生の氏名を擧ぐれば次の如し

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|-------|-------|-----|-------|------|-------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|
| 徳武國久 | 服部啓次郎 | 嶋田要吾 | 嶋田勘四郎 | 長谷川義雄 | 林井恒 | 今井實太郎 | 倉澤建雄 | 吉村金次郎 | 小宮光治 | 宮尾長一 | 宮原昇士 | 宮原貞次 | 宮原三樹 | 丸山康三郎 | 木村左金吾 | 市川康明 | 宮澤嘉一 | 岡澤謙三 | 相澤國治 | 塩川金次 | 加藤正次 | 樋口久次郎 | 小林哲三 |
|------|-------|------|-------|-------|-----|-------|------|-------|------|------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|------|

新築校舎の様

起工の日より既に一年餘四方の山霞立ちこめて人は花に歌ひ酒に酔ひ心自ら長閑なる此頃工事も日々に拂取り本年九月頃には將に竣工し輪奐莊嚴の美を見んとす位置は閑雅幽靜前に趣味深き演習林を眺め實に山林學校の敷地としては唯一の場所たるを疑はず

校友會役員任命

矯風委員

- | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|--------|------|-------|-------|------|------|--------|------|-------|
| 吉田佐十郎 | 木下稗藏 | 角田久福 | 前田喜代次郎 | 征矢朴郎 | 小羽根安次 | 吉田佐十郎 | 木下稗藏 | 角田久福 | 前田喜代次郎 | 征矢朴郎 | 小羽根安次 |
|-------|------|------|--------|------|-------|-------|------|------|--------|------|-------|
- | | |
|-----|--------|
| 部 長 | 吉田 佐十郎 |
| 部 長 | 西尾 嘉一 |
| 部 長 | 木下 稗藏 |
| 部 長 | 角田 久福 |
| 部 長 | 角田 久福 |

卒業生送別會

三月廿七日午後一時より第八回卒業生送別會

- | | | |
|-----|----|--------|
| 庭球部 | 部長 | 安藤次郎 |
| 弓術部 | 部長 | 杉本直 |
| 部 | 部長 | 佐藤一郎 |
| 部 | 部長 | 山本政之丞 |
| 部 | 部長 | 石曾根四郎 |
| 部 | 部長 | 前田喜代次郎 |
| 部 | 部長 | 濱武雄 |
| 部 | 部長 | 角田久福 |

○入學式

四月十五日午前九時より講堂に於て新學年
生入學式を舉行す校長の勸語捧讀並に新入
生諸子に對し懇篤なる訓辭あり了て在校生
總代の迎辭次で新入生總代の宣誓の辭あり
て十時閉式せり其氏名及出身地左の如し

- | | |
|---------|-------|
| 西筑摩郡 | 尾關權三 |
| 愛知縣北設樂郡 | 今泉彌作 |
| 埴科郡 | 久保照人 |
| 西筑摩郡 | 千村吉雄 |
| 愛知縣 | 山内勘一 |
| 西筑摩郡 | 水野勘一 |
| 小縣郡 | 稻葉増吉 |
| 西筑摩郡 | 松尾金次 |
| 北安曇郡 | 關琴義 |
| 愛知縣西加茂郡 | 成瀬力三 |
| 上水内郡 | 塚田大 |
| 岐阜縣惠那郡 | 三尾新太郎 |
| 松本市 | 澤柳壽夫 |

- | | |
|---------|-------|
| 岐阜縣惠那郡 | 中垣英一 |
| 愛知縣寶飯郡 | 岩瀬幸吉 |
| 南安曇郡 | 二木季人 |
| 上水内郡 | 田中實 |
| 北安曇郡 | 齊藤藏 |
| 岐阜縣益田郡 | 今井安徳 |
| 山梨縣南都留郡 | 天野吉郎 |
| 岐阜縣益田郡 | 梅田太郎 |
| 新瀉縣佐渡郡 | 羽豆太郎 |
| 西筑摩郡 | 海老澤彌一 |
| 岐阜縣加茂郡 | 新田彌一 |
| 諏訪郡 | 吉澤直一 |
| 諏訪郡 | 小口孝一 |
| 全上 | 牛山直一 |
| 石川縣羽咋郡 | 深美孝一 |
| 西筑摩郡 | 長谷川房藏 |
| 岐阜縣加茂郡 | 後藤貫一 |
| 廣島縣山縣郡 | 不兔修六 |
| 靜岡縣駿東郡 | 鈴木勝清 |
| 上高井郡 | 毛利三郎 |
| 西筑摩郡 | 花村男三郎 |
| 更級郡 | 石坂季治 |
| 岐阜縣惠那郡 | 赤羽高潔 |
| 東筑摩郡 | 山崎三男 |
| 埴科郡 | 市岡新三 |
| 岐阜縣惠那郡 | 大熊康三 |
| 上伊那郡 | 柳澤義雄 |
| 山梨縣南都留郡 | 佐藤光造 |
| 埴科郡 | 小崎次郎 |
| 全上 | 神戸利八 |

西筑摩郡 竹原久治
(以上四十五名)

○伊藤教諭告別式

本校伊藤教諭は獨澳兩國へ留學の爲近々渡
航すべき豫定なるを以て十八日午後零時半
より雨天体操場に於て告別式を舉行せるが
校長の挨拶に次で伊藤教諭の告別の辭あり
生徒總代の送辭ありて閉式す先生は去る明
治四十一年十二月本校に赴任してより林學
法制經濟及英語等を擔當せられ尙校友會雜
誌部研究顧問として盡瘁せられ功績一方な
らず同僚生徒の瞻仰する所なりしを今や去
つて海外に行かれんとす誠に惜むべし

○觀櫻會

十八日午後二時より例年の通り金刀比羅山
上に於て觀櫻の宴を張り兼ねて伊藤先生の
送別の會を開く櫻樹を柵に紅白の幔幕を引
き廻し庭を敷きて茶菓壽司等の饗應あり有
志の士は交々立ちて伊藤先生の留學を賀す
るあり離別の悲を述ぶるあり悲喜交々至る
之に對して伊藤先生の謝辭あり餘興として
劍舞詩吟數番歌を盡して散會す當日は開會
前夜飛び天候險惡なりしも開會中は幸ひ雨
降らず午後四時歸途に就けば雨漸く至りて
風色轉々凄然

寄宿舎より一筆呈上仕候

三月 私共の年越しなる第三學期試験は二
十四日を以て終了仕候債鬼ならぬ試験に
苦しみられて閉門喰つた武士よろしくで勉

強した舎生連はサア濟んだと言は許りに
停車場さては關山公園と散策を試み申候今
回卒業せらるべき諸兄は學成り業終へて故
郷に歸るべくうが仕度忙しく足元より鳥
が立つてふ爲体に御座候第二の故郷として
今後思ひ出多き福島を去るは何ぞなく妙に
悲しい様に思はれると去らるる諸兄の申
さるる御言葉に有之候ひき
二十五日には新開村に開催されたる製炭講
習參觀の爲め例の九メンバ携帶にて黒川へ
赴き申候講師の熱心なる築竈法及製炭法は
皆氏の實驗上より割り出したる原理にて多
大の參考と相成申候
二十六日に第三學期成績發表せられ申候喜
ぶ者安堵するもの落胎するもの色々見え
申候ひき
二十七日には證書授與式舉行せられ候同日
寄宿舎にては卒業諸兄を送るべく食堂に午
餐會を開き福嶋名物見晴しのすしに舌鼓を
打ち申候本日夕方迄に多くの卒業生諸兄は
古びたりといへゆかり深き寄宿舎を立ち
出でられ坐に寂しさを感し申候在校生此十
日間の休暇に父母の膝下にかしづかんと夫
々歸省して二十八日朝迄に一人残らず歸り
申候

加へられ皆々喜び居り候結句此方が諸事平
等に進み公平に御座候
六日より實習汗くさく、眞黒に日に焼け
て疲れ果てたる實習歸りの体を寄宿舎に横
ふる時あまり壯美ならざる舎パラタイヌの
想行之候而して吾等が話頭に上るは來るべ
き新入生の噂に有之候茲に至りて去る年自
分の新入當時の追憶湧き來り話に花を咲
かせ申候
果然十五日四十有餘名の新入生を相迎へ申
候懐しい故郷の山河日々アマツタレれた
父母の膝下を離れた新入生を古參たる生等
は滿腔の好意を以て歓迎いたし候然しながら
中にはまだ乳を呑み足らぬ様な君も之あ
り寄宿の窓にもたれ飛び行く雲に心を故郷
に馳するも有之候
ここ暫くは上級生として生等は誠と寛との
金科玉條も一意新入生諸氏を導く覺悟に
候へばいつやの如く僞手紙にだまされて
ペソをかき電燈の油を貰ひに舎監室まで出
張する者もなからんかと存し居り候

其後の寄宿舎

客月二十七日數多の卒業生諸兄と別れし
た寄宿舎は其背から急にひつりしてしま
つた誰れも彼れも口にこう言はねありく
と寂しい色の見えたはさすが兄となり弟と
なつた間柄である

翌二十八日からは例によつて例の通り十日

間の試験休みて其日の晝頃には全部歸省
の途についたので跡は相も變らぬ鼠公等の
天下となつたで別に書く事もないが唯一つ
毎日大工が入つて其處此處の修繕をした事
である例へ此處一年で拂下げになるとはい
へ兎に角今の所は我々の本家本元であるか
ら出來るだけ完全にしなければならぬまいや
れ〇小屋だいや何の彼のと悪口するは自分
を罵ると同様な話だ
さて長いやうで短かつた不規則生活四日
で終りをづけ此に又再び規律的生活をつづ
ける事となつたが指定の五日に入舎した者
はかれこれ三十名翌日は殆ど全部揃うて各
自休暇中の失敗談や旅行談で花を咲かせ和
氣霽々として眞にかばかりの團欒は又とあ
るまいかと疑はしめた
かくて今春新學期は六日に始業式を挙げた
が之と共に新に改革された事は層一層の規
律を保たんが爲に萬事嚴重を旨とし外出の
際は斷然和服を廢して制服とし(同時にマ
ントは默許となる)敬禮は凡て舉手を以て
行ふ可く規定された之は皆の喜びをる所で
第一活動に便利従つて自然に舉動活潑にな
る道理であるが元來福翁だかの言はれた通
りこれからの活動的人間は和服は斷じて不
可是非とも洋服でなければならぬのだ
尙又〇費が今迄よりも〇五圓だけ減せら
れたがこれは文明の餘澤であらう

福嶋便り

J. Y. 生

暑いも寒いも彼岸までとはよく申すことに候彼岸になつても未だ寒い今年の福嶋に候却て寒中より寒い位にて候ひきとは云へ時候は争はれず次第に春めき渡り候

三月の月末には某々有志家發起となり水無神社前の八澤川沿岸即ち伊谷方面に梅苗を植付け水無瀬梅林と命名致し候全所は遙かに駒ヶ岳の秀峰を望み絶景とは行かざれば上の部に候年經て梅花馥郁として咲き香ふに至らば結構なることに候三月の月末より四月の月始めにかけて桃の節句にて昔をしのばれ候四月九日には桂内閣總理大臣中央線視察の爲來福致し候

當日は雨天にもかゝらず停車場には出迎人多數にて非常に混雜致し候當今の福嶋は梅は眞盛り櫻はろろく開かんとのどかなる景色に候櫻と云へば此頃より關山公園に全苗を植付け居り候水無瀬梅林全機花咲かん春ころ待ち遠しく候先今回はこれにて御免仕り候

會費領収報告

- 壹圓 柳澤邦信君
- 全 遠藤治一郎君
- 全 林 與五郎君
- 全 高橋金作君
- 八拾錢 杉本貢君
- 五拾錢 塩澤英一君

- 全 四拾錢
- 全 三拾七錢
- 全 三十六錢

編輯部より一言申

上候

花咲き鳥歌ひ日に増し暖氣相加はり候處會員諸氏には益々御壯健に渡らせられ大慶至極に存候借年度茲に改まりて我校友會役員も別報の如く變更相成幸か不幸か無識無能の生等此に編輯の大任に當る事と決定今更慚愧の至りに御座候先輩諸兄幸に吾人の驚鈍を憫まれ可然御指導御援助を賜度御願申上候終に臨み原稿奮て御投入被下度希望に堪へず候まづは新任の御挨拶傍此の如くに御座候早々

- 三原昇君
- 兒野榮君
- 宮崎惠喜太君
- 遠藤宗作君
- 小瀧伸太郎君
- 新田忠次郎君
- 北村竹次郎君
- 脇田正義君
- 大森久治君
- 金井澄水君
- 篠原忠治君
- 山田治一君
- 和田守衛君
- 米山修君

